

introduction

今、変形性足関節症に対する治療の議論が熱いです。変形性膝関節症や股関節症と比較して頻度が少なく、変形性足関節症はこれまでは大きく注目されることはありませんでした。また、関節症の原因が外傷によるものの比率が高く、手術治療のオプションとしては関節固定術が gold standard とされ、手術法に関して議論になることも少なかったように思います。しかし、最近ではさまざまな手術のオプションが増え、学会等でもディスカッションする機会が増えてきました。特に骨切り術に関して、その適応は施設により大きく異なり、まだ混沌としている状況にあります。下位脛骨骨切り術 (low tibial osteotomy ; LTO) は 1980 年代に開発された術式であり、適応に関しては 2 期と 3a 期の関節症に限定されますが、脛骨遠位斜め骨切り術 (distal tibial oblique osteotomy ; DTOO) が登場し、なかには 4 期の症例にまで適応されるようになっております。これらはともにわが国で開発された術式であり、さらに深化させる必要があります。膝関節では膝周囲骨切り術という概念が一般化してまいりましたが、足関節に対しても足周囲骨切り術として総合的に議論する時代が来ているのかもしれません。

また、人工足関節に関しても、これまでわが国では TNK ankle[®] と FINE ankle[®] の 2 つしか臨床で使用できるモデルはありませんでしたが、外側侵入で行う TM ankle[™] が 2018 年に導入されました。また、昨年度はアルミナセラミック製の人工距骨が保険収載され、人工足関節置換術において、人工距骨を併用した術式 (combined TAA) が開発されました。これは再置換術に用いられるだけではなく、距骨に大きな損傷がある変形性足関節症に対する初回手術としても用いられるようになり、良好な成績が報告されてきております。このように手術治療の選択肢が多くなり、適応を明確にするために画像診断も進歩してきております。また、手術治療だけではなく、最近では保存治療にも注目が集まっております。これまで変形性足関節症に関しては、変形性膝関節症の治療のエビデンスを応用して考えられることがほとんどでありましたが、今後はより専門的に足に関して発展していくものと考えております。

本特集では、現在わが国で考えられている変形性足関節症に関する事柄のすべてが網羅できるように編集いたしました。是非皆様方のお役に立つことができれば幸甚に存じます。

奈良県立医科大学整形外科

田中康仁